

22. 外来化学療法室における患者アンケート調査

看護部 内堀由美子, 小堀文恵, 上野恵美, 東野明美

薬剤部 大塚敦郎, 中村 篤, 大塚敏広
腫瘍センター化学療法部門 石濱洋美

【はじめに】我々は安全性の確保を念頭に置いた外来化学療法室を新設し, 4年が経過した。

【目的】外来化学療法室の設備・運営に関して患者側のニーズと我々の取り組みに乖離がないかを検討する。

【対象】平成18年5月より外来化学療法室で化学療法を受けた患者。男性49例, 女性48例で, 疾患内訳は肺癌22例, 乳癌23例, 血液腫瘍19例, 膵臓癌14例, 胃・大腸癌12例, その他7例であった。

【方法】無作為抽出による無記名アンケート調査。口頭及び文書で目的等を説明した。レジメンと疾患名のみを記入した用紙を手渡し, 回収箱により回収した。

【結果】97%の患者が施設に対して満足していると答え, 快適性を求める備品の設置希望は僅か(7%)であった。専用の化学療法室や, 専従医, 専従看護師, 専従薬剤師も95%以上の患者が必要と考えていた。化学療法室に対して最も重視している事は安全性(85%)であり, 副作用の強い人ほど有意に重視する人数が増加した。担当科により治療までの待ち時間に差を認めたが, 通院時間や待ち時間, 副作用発現状況別に検討しても90%(どちらでもを含めると96%)が入院治療や治療中止ではなく, 通院治療を希望した。専門医(腫瘍内科医)の受診を希望する患者が多く, 現在の担当科による継続を求めているのは42%であった。副作用が強いほどその傾向は強く, 病気と闘う意思は強いが, 治療内容や副作用に関しては他の医師の判断を聞いてみたいという患者像が認められた。

【結論】快適性利便性, 副作用状況をある程度犠牲にしても, 安全な外来通院による継続治療を望んでいる事が有意差を持って示された。担当医や設備に対する不満はないものの, 専門医を受診してみたいという希望が多く今後考慮する問題と考えられた。

23. 2型糖尿病患者を対象とした自記式質問表(QUEST問診票)による逆流性食道炎・胃食道逆流症の評価とオメプラゾールの効果

内科学(内分泌代謝)

加瀬浩之, 松村美穂子, 川越宣明, 鈴木國弘, 伴場信之, 門傳 剛, 服部良之, 笠井貴久男

【目的】逆流性食道炎(RE)・胃食道逆流症(GERD)に高い感受性を示すQUEST問診票(Q)を用いてRE・GERDを評価し, オメプラゾール(O)による効果も検討した。

【対象・方法】2型糖尿病患者629名(DM)と人間ドック受診者531名(Cont)。胃/胸の不快感あり(+)と答えた全員にQを実施。DM16名にOを20mg/day2週間投与し再度Qを実施。

【結果】(+)と答えた率は両群に差はなし。スコアはContに比較してDMで明らかに高く(Cont/DM:1.1/4.0), RE・GERDを強く疑わせる4以上の頻度も高値であった(2.1/7.8%)。DM群4以上は罹病期間, 神経障害あり, HbA1cが有意に高値を示し, Oの投与は明らかにスコアを低下させた(前:11.9, 後:0.9)。

【結論】罹病期間が長く神経障害を有するDM患者ではGE・GERDを併発する可能性が高くなるため, Qによるスクリーニングを行い必要によりO等による治療の必要性が示唆された。